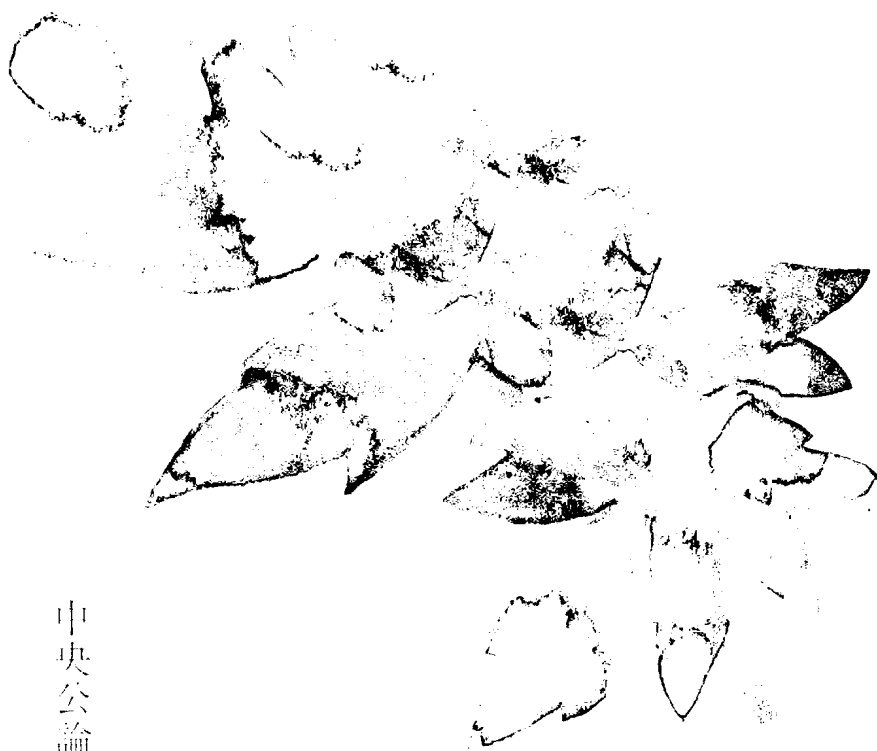


白の波間

舟橋聖一

舟橋聖一

白の波間



中央公論社

白の波間

©一九七六

昭和五十一年四月十日 印刷
昭和五十一年四月二十日 発行

著 者 舟橋聖一

発行者 高梨 茂

印刷所 三陽 社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一

電話(五六)五九二一—九

振替東京二一三四

検印廃止

白の波間

一章の二

五月晴れなのに、肩が凝る。幾野彰二はいつの間にか、六十何年かの人生を過ごしてきてしまった。

六年前の五月に、妻が死んだ。それからこのかた、鰥夫暮らしである。男は妻を愛したつもりだったが、妻のほうは男を怨んで死んでいる。そのことはこれから時々引用する妻の遺書のような雑記帖の文章で明らかである。

——肩が凝ったり、膝が痛んだりするのも、還暦を越してから現象だが、近頃は規則的に、火曜木曜ごとに女鍼医のあつ子に来て貰って、鍼を打つことにしている。あつ子の鍼は背骨から打っていく。右側を五本打ち、それから左に代り、更に右になって、また左にいく。鍼の尖が消毒不完全で、万が一破傷風菌がついていたりしたら一大事だが、背に腹は替えられないので、火曜木曜が待ち遠しい程になった。

療治がすむと身が軽くなり、首もよく動く。あつ子は亭主持ちである。彼も六十三まではまことに元気で、壮者を凌ぐ程だったのが、六十三から急にガタがきて、何から何までいけなくなつたと言う。

「わたしも恰度同年ぐらいだぜ」

「存じておりますよ。だから旦那様も今から用心して、いつまでもお丈夫でいて下さらなくちゃあ……あつ子が一所懸命治療してさしあげますからね……すべて転ばぬ先の杖でございますよ」

幾野が妻の雑記帖を発見したのは一周忌が終った日のことで、やはり五月と関係がある。それを見るまでは妻は男の愛に満足して死んだものと思っていたから、そうではなかったと知った時、実はびっくり仰天した。その雑記帖は衣裳簞笥の底に並べてあり、その上へのり置小紋や綸子お召の着物が何枚も重ねてあって、そんなところに雑記帖があるとは想像し難いことであつた。いたってありふれた横書きの雑記帖に、ペンで縦書きしてあつた。妻の衣裳を形見分けするために、簞笥の抽斗をあけていくうちに、雑記帖が見つかったわけであるが、幾野以外は誰れも見えない。世間では鴛鴦夫婦と思っていたし、幾野としても世間の目にそう見えて不思議はないものと思っていた。

男と妻がどうして結婚したかと言えば、男が男の祖母の郷里へ墓参に行ったことに端を発したのである。昭和のはじめであつた。そこは駿河湾に臨んだ小市街で、山が海に迫っているから、長っ細い街道筋の家並が続き、男の先祖の菩提寺は、山の中腹にあつた。寺と街道の間を、東海道線が走っているの、石段を上ってから寺の山門に入る前

に、汽罐車の煙突の上を跨ぐ高さに石の橋があった。山門を入ると右手が本堂で、左の山道を暫く行き、木立ちを越したところに沢山の墓地があった。その一つに、幾野家累代之墓と彫った墓標がある。誰れが詣でたのか、灰になった線香と潤んでしまった山吹の花が供えてあった。もっとも男の祖母は幾野姓ではない。そこへ入る予定ではなかった。東京中目黒祐天寺に亡夫殿浦の墓地があり、祖母の名前の宮古の二字も彫ってある。それへ朱が入っているのは、やがてその下へ葬られるという約束だったのである。従ってこの菩提寺の墓は、祖母の実家の墓で、幾野の実母が一番新しい仏であった。

墓参りがすむと、よく湿ってはいるが、踏み固めてあつてめったな雨では泥濘にはならない山道を、男は男の祖母と手を繋いで歩いた。苔の匂いが鼻をつく。来た道と帰る道は違つており、そこを登って降りると、本堂の裏を抜けて、庫裡の庭木戸口へつながるようになっていた。坂をおりる少し手前に、大きな榎の木があつて、その形のよさに幾野は目を奪られたが、そこに立つと、はじめて海が望まれた。静かな海面はローヤルブルーの濃淡に見えた。

庫裡には二タ組ほどの先客があつた。若い僧が薄茶を運んできた。先客の一ト組は間もなく帰り支度になったので、残りは二タ組になった。別に顔馴染みでもないのに、男の祖母は少し離れたところにいる親子連れの客に話しかけた。お下げに結つた髪の中程に、黒いリボンをつんだ

娘がいた。この時偶然女と顔を合わせたのが初対面であつたが、庫裡の縁側から見る瓢箪型の池のほとりに、真ッ黄な粉のふいているような山吹の花が咲いていたから、やはり五月の初めだったかもしれない。ところが娘のしめている名古屋帯のお太鼓には、季節より少し早めの濃紫のてっせんの花が染めてあつた。

祖母が、

「何て可愛らしいお嬢さんだろうねえ」

と言つた言葉だけが、男の耳に、今もありありと残っている。早く言うと、まず祖母のほうが気に入つたのである。祖母は金蒔絵の華奢な煙管に、白梅という刻煙草を詰めて、桐のまるい手焙りに埋けてある佐倉炭の火種で火を点け、さもうまそうに深く吸って、煙を吐き出した。殿浦死後の祖母の家は、それほど裕福ではなかったが、刻煙草にしても、白梅だけでなく、もう一種別の真を混ぜて、その分量も、自分の手で混ぜないと満足しないという几帳面さだった。刻を入れて置く煙草入は、婦人用の小型で、古渡りの裂れ地が手に入ると、亀井堂の番頭を呼んで、註文で作らせた。煙管にも長短や太さがあるので、それに合わせた寸法にする。今から思うと、ずい分凝つた暮らしをしていたように思われるが、当時はそれが、それ程贅沢なわけではなかった。誂え物の幅が利き、出来合いというのが、はるかに下等なものに見えていたのである。そのうちだんだんに規格品のほうがのさばり出し、たとえば煙草入にし

てからが、註文して作らせるようなことが絶無に近くなつたのは、なんと言つても統制経済になつてからのことである。更に戦時経済から占領経済に続くこの半世紀の間に、事情は全く逆転してしまつたのだ。米にしても、東京に居て、庄内米でも、越後米でも、肥後米でも、居ながらにして取り寄せられたし、そういううまい米を適当に混ぜて炊くと、更においしい飯が食べられた。米不足から、外米が配給されるようになると、秋田の米を東京へ取り寄せて食べるような贅沢は許されなくなつた。その庫裡にある桐の手焙りにしても、よく杵の通つた上等物で、むろんおとしには銅が使つてあつたが、十年そこそこで銅の供出が行われ、火鉢にまでトタンのおとしが使われるようになった。

——幾野は庫裡の縁を降り、白い砂利を踏んで、真ッ黄な粉をふいたような山吹の花の傍まで行つた。そこで振り返ると、親子連れの女客が、男の祖母に、金蒔絵の煙管を見せて貰つてゐる風だつた。煙管に続いて煙草入を見たあと、祖母の腰に下げていた印籠をちよつと拝見させてくれと言ひ、祖母がそれを抜いて、女客の手へ渡すのが、幾野にも見えた。それはこの間、祖母が田舎町の道具屋で見つけて買った掘出し物だつた。二段組合せの巻印籠で、南天の蒔絵がしてあり、その紅い実は、珊瑚珠が嵌め込んであつた。芥子粒のような紅い実が、女持ちらしい色気になり、祖母の締めている銀鼠の塩瀬羽二重の帯によく似合つた。

祖母は古道具屋をひやかし出すと、一時間でも二時間でも粘るので、お供の彰二は閉口した。町の本屋を捜して歩き、翻訳本を立読みし、時間を見はからつてから古道具屋へ帰ると、祖母はまだ買うとも買わないとも決めないで、その店頭で、道具屋の主人と話し込んでゐるのだつた。掘出し物は矢鱈にころがつてゐるものではないが、多くは店の奥に藏つてあるので、四方山話をしているうちに、主人がとつときのを出して来るようにし向けるコツが祖母の得意であつた。結局主人のほうも客を見てゐるわけだから、売つてもいい客とわかれば、奥の戸棚からでも抽斗からでも、出して来るに違ひなかつた。

その時の巻印籠に、トルコ玉の根付がついてゐたことは覚えてゐる。古道具屋で買つた時は、象牙の根付だったが、祖母は象牙を嫌つて、いつの間にか青いトルコ玉に取換えていたのである。トルコ玉の青と南天の紅い実の珊瑚がおもしろい対照をなしてゐた。が、煙草入のほうは、津軽の刺しこぎんだつたか、呉綯に黒の木綿糸で更紗模様を刺しにしても、祖母は津軽あるいは南部の刺しこぎんが好きで、その小裂れを見つけると、紙入にしたり、ハンドバッグにしたり、提げ袋にしたりした。呉綯は黄色や藤色のそれを楽しんだ。黄色い呉綯の紙入の裏に、唐棧縞を使つたりした。

祖母と娘連れの女客との間に、暫く對話が続いてゐたが、

そのうち小坊主が迎えに来て、女客と娘は経をあげに本堂へ案内されて行った。

庫裡へ戻った幾野は煙草盆の吐月峰に、

ボン

と煙管の首をたたいた祖母に、

「そろそろ帰ろうじゃありませんか。それともお経をあげるんですか」

と促した。

「別にお祥月でもないから、お経には及ばないでしょう」

それで男と男の祖母は、庫裡の出口から外へ出た。そこは十畳敷程の暗い土間で、右手に大きな竈が三つ程並んでおり、左側の框の向うは、やはり十畳程の板の間で、揚板がテカテカ黒光りしている。そこまで小坊主が送って来た。本堂へ廻れば山門へ出るのだが、こちらからだと、緩い女坂を降り、遮断機のない無人踏切を通らねばならない。カーブが近く、見通しが効かないので、用心しないと危険である。幾野は祖母の手を執った。ようやく街道へ出てから、

「何の話をしてたんですか」

と幾野は聞いた。

「はじめ煙管を見せて下さいと仰有るから、それがもとで、印籠を見せたり、紙入を見せたり……刺しこぎんが珍しいと言うんで、今度手に入ったら、ハンドバッグでも作って差し上げましょうってお約束したの」

「本当のおっ母さんでしようか」

「あんまり似ていないね。でも、そこまで聞いては失礼だから……黙っていたけれど。あのお嬢さんの弟が亡くなったらしいの。数えの四つだったそうよ」

「そんな話までしたんですか」

幾野は自分が山吹の花を見に行つたちよつとの間に、そんな話をかわすとは、さすがに女同士だなあと感心した。旅館までの帰り道、宮様饅頭を買っていると、東海道線下りの急行が、地響きたてて饅頭屋の背後を通過した。

「いつの間に、印籠の根付を取換えたんですか」

「知ってたの？」

「西村で買った時は象牙細工だったでしょう」

「象牙はすぐ赤くなるし、第一、品が悪いでしょう」

「それもそうかな。あの玉は高いんでしょう」

「トルコ玉にだって、安物もあるわよ」

「あれはトルコ玉ですか。おばあちゃんの誕生石でしう」

トルコ玉なら安物といつてもそんなに安い筈はない。

——旅館に着いてから、幾野は祖母に更めて印籠を見せてもらった。

座敷は海に面している。時々磯臭い風が吹き抜けた。祖母は気が向くと、こうして故郷へ墓参に帰るのだが、その時はいつも大学生の幾野がお供を仰せつかる。幾野とすれば旅費は全部祖母が持つてくれるのだし、たまに空気のい

い海岸の宿に来て、鯛や鮑を遠慮なしに食べられるから、万障繰りあわせても、この役をほかの者には取られたくなかったのである。

夜になってから祖母は言った。

「さっきのお嬢さん、麻里子さんっていうんだって」

「名前まで聞いたんですか」

「あちらで仰有るんだもの。無理に聞いたわけじゃありませんよ」

「黒いリボンをしていましたね」

「ああいうお嬢さんをもらっちゃあどうかしら」

「おばあちゃんはすぐそう言って、勝手に決めてかかるけれど、あちらさんが何と云うかわからないでしょう。案外決まった人がいるかもしれない」

「だから話してみなくっちゃわかりませんよ。そんなら聞きますがね、彰ちゃんは誰れか好きな人がいるの？」

「そんな人はいませんよ」

男は躊躇なく否定した。

「悠子さんとは何でもないの？」

「冗談じゃない。おばあちゃん」

「それで安心したけれど。もしそんなことがあったら、それこそ大変ですからね」

「おばあちゃんはどうしてそんなことを訊くの？」

「麻里子さんのようないいお嬢さんを見ても、彰ちゃんた

ら、全然気が乗らない風だし、折角話し出したところで、プイと庫裡からおりてっちゃうでしょう。なんだか気の毒な気がしたの」

——祖母は彰二の不作法を咎める風である。その頃の日本の家庭では、行儀作法ということに、重点が置かれていた。前にも言ったように、祖母の家庭は上流ではなかったけれど、躰の厳しさという点では、上流家庭に負けなかった。祖母の生活のあり方は、従って実用的というその頃の流行語には当て嵌まらなかった。東京の中目黒の祖母の家は殿浦が亡くなってからも、良人の存生中と同じように、よく掃除の行き届いたキッチンとした暮らした。祖母の部屋は床の間のある六畳間で、中央に殿浦がマニラで手に入れたきた支那風の六角形の陶器の火鉢が置いてあり、ほかに鎌倉彫の経机と総桐の衣裳簞笥があるので、部屋は決して広くなかったが、いつも整頓されていた。火鉢の横に炭取りが置いてあって、祖母はいつの間にか炭をついでおくので、火種が絶えるということはなく、灰はいつも灰ならしできれいにならしてあった。床の間は間口は四尺五寸で、その割に奥行が深く、天井からの落し懸も深かったから、ちよつと暗ほつたい床の間だった。いつも横物が掛けてあったが、十日目ごとに取り換えるらしく、書もあれば画もあった。神谷町の道具屋で、六之丞というのが宮古の氣に入りだった。彼は昔、亀井堂にいたこともある。やはり時々掘出し物を持つてくる中に、「高野切」などもある

たが、眞實については、保証のかぎりではなかった。六之丞に言わせると、貫之自筆の高野切に絶対間違ひなしと言ふのだが、定家流の書体がまじっているから、にわかにはホシモノとは言ひ難いと言つて、値切つたりする宮古のほうが、目が高いと言えないことはなかった。そうかと思えば、明治の歌人海上胤平の筆蹟の、源実朝の歌を書いたのなどは九分通りホシモノに違ひなかった。例の有名な「山はさけ海はあせなむ世なりとも君に二心われあらめやも」のうち、下の句のわれについて、定家所伝本には「わがあらめやも」とあるのは、誤写だというのが、祖母の師匠の主張であつた。胤平は大正五年まで生きていて、八十八で死んだというから、逆算すると文政十一年の生れである。文政に生れて大正に死んだとすると、十九世紀日本の波瀾万丈の時局を生き抜いてきたのだから、ずい分変化の多い一生だつたらしい。はじめは武芸を習ひ、山岡鉄舟や千葉周作の門人としてスタートし、明治に入つてから山形県裁判所の判事補をやつたりしたあと歌人となり、歌塾を開いて門弟数千人に及んだという。その胤平の師匠は安政四年歿の加納諸平で、その諸平の先生は本居大平である。こういう詮議立ても祖母の好むところで、記憶力も強かつた。が、それというのも、胤平の門に学んだ高久貞義先生の家へ毎週火曜日の午後通ひ続ける祖母だったので、六之丞が胤平や諸平の筆蹟を探してくると、無条件で買わずにはいられなかつたようである。その宮古も三十代までは日髪日風呂

とうきみやつし、ほの紫のでがらで中差しを巻いた丸鬘に金梨地の前櫛をさしたりしてゐたそうだが、彰二はその頃の祖母の印象は漠然としてゐる。彰二が見憶えた頃の祖母は、鬘も前髪も小さく、てがらは淡鼠で老婦人向きであつた。それでも鬘を形よく張出し、鬘も抜き衣紋の肩にかかつてゐた。が、殿浦に死別すると同時に衣紋は抜かず、いさぎよく切下げにしてしまつたのである。従つて故郷の菩提寺へ墓参に来るようになった頃は、切下げ姿になつてゐた。

ところが、旅に出る祖母の鞆の中には、小枕が一つ入つてゐた。後家になるまで、祖母は日本髪に都合のいい箱枕を使つていたので、その癖がついてゐるのか、旅館の枕では丈が足りない。それで枕の上に小枕を重ねると、恰度箱枕程の高さになるのであつた。

その小枕は小豆色の縮緬の筒型で、中には蕎麦殻が入つてゐる。自家用の枕を持参するほどだから、二晩か三晩の旅行でも、荷物はやたらに多かつた。着た切り雀で東京を離れることなどは、とても考えられなかつたらしい。女の風俗も變つたもので、今は寒中でも裏のないウールを着たりするが、祖母の時代は真冬は真綿の綿入れ、五月いっぱいは袷、六月から単衣物、それから絹縮緬。平絹とか透綾とか明石とかは、猛暑にならなければ着なかつた。九月は秋の薄物から単衣物になり、十月一日以降が再び袷である。そういう衣更えについて、祖母には一日の狂ひもなかつた。

五月のうちに、単衣物を着ることもなければ、六月になっても袷を着ているようなことはなかった。五月の旅にも、靴の中には、織ったものと染めたもの。羽織も黒に色物。帯も締めてきた銀鼠の塩瀬のほかに、袋帯を一本入れてくるといふ風であった。

厄介なのは、旅簞筥である。靴は赤帽にまかせられるが、旅簞筥の中には、茶碗や水注子などの陶器が入っているで、お供の幾野がぶら下げるほかはない。祖母のそれは桐で作つてあるので、持ち運びは軽かったが、それでもこれ物注意なので、幾野は一番神経をつかった。

旅簞筥は一名利休簞筥とも言つて、関白時代の秀吉の小田原出陣の際、千利休の創意に成るものだという。蓋は同じく桐で、俵餽式になつてゐる。納めてあるものは、夏なら夏茶碗、冬なら冬茶碗。柄杓、茶筌、茶杓、棗、袱紗、水注子とその蓋、香合、羽根帯などである。これは旅先の宿屋で祖母は少くとも一日一回は、薄茶を点てて飲まずにはいられないからであり、その相伴で、彰二も飲まされる。さつき墓参の帰りに、宮様饅頭を買つてきたのも、点茶の際甘味を必要とするからである。

が、小枕と利休簞筥だけなら、その頃の老婦人が旅へ持つて出ても、それ程不思議ではないが、ほかに箸入れにいれた箸や、三つ組の小皿、白磁の急須などがあるかと思えば、銀製のフィンガーボールまで持つてくる。これは宿屋の女中に小皿やフィンガーボールを貸してくれと頼んでも、

面倒くさがつて、いい顔をしないのが普通だからである。祖母のような昔氣質の婦人が、旅行先へフィンガーボールを持参したのは、彰二もびっくりしたものだ。当時フィンガーボールを出すレストランは、東京でもそんなに多くはなかった。それは恰度利休簞筥の中の水注子が携帯用であるように、普通のフィンガーボールより小振りで、従つて特別に注文したものかもしれない。

その銀製の器には、底に浅く水または微温湯を入れる。指先を洗うためである。主としてデザート用だが、パンなどは手で食べる関係から洋食に指先を洗う必要があるのは当然だ。この際両手を交々入れるのがマナーで、一度に両手を入れるのはうまいくない。男性は器の水で唇を洗つてもいいことになつてゐる。こんなことも、彰二は祖母から口伝のように教つたのである。

「この間築地の精養軒で、田舎のお客様がフィンガーボールの水を飲んでしまつたんだそうですよ」

そう言つて宮古は笑うが、彰二にしてからが、知らなければそんなぶまをやらかさないとには限らない。その話を聞いた時、正直なところヒヤリとした。ついでに彼は、「おばあちゃんはどうして急須まで持つてくるんですか」と聞いてみると、

「旅館の女中さんというものは、なんでも下げるのが好きでしょう。お急須が欲しいと言えば、持つてきてはくれるけれど、すぐ下げようとするから、やっぱり自分用のを部

屋に置くほうが安心なの」と言うのだった。できれば醬油差しも、食卓塩も、シユガーポットも、コーヒー沸しも持ってきたいのばかりのようだった。

一の章の二

話は数年さかのぼる。幾野彰二と真山悠子が知り合ったのは、歌舞伎座の東側廊下であった。当時、東京から少し離れた小都市の、旧制高校に学んでいた彰二は、この日いつもと同じく、祖母の宮古に連れられて芝居見物に行った。震災前であったから、劇場は椅子席でなく、平土間が大部分を占める。高土間、新高、鶺鴒などが難段。そのほか二階、棧敷、前船等の区別があった。幾野と祖母は平土間の前から四柵目を取り、ほかに六之丞と行儀見習のお篠さんが同行した。一番目の幕が終ったとき、

「あら、真山さんのお嬢さまが鶺鴒にいらっしゃるわ」と祖母が言った。

「ほんとだ。悠子さんだ。今日はまためつぱう綺麗だなあ。あの鶺鴒だけ特別に光っているようですね」

六之丞が相槌を打つ。祖母は平土間から仮花道へ出る細い渡りへ足を掛けながら、

「ご挨拶に行かなくっちゃあねえ……彰ちゃんもおいで」と言った。彰二は宮古の用心棒なので、文句なしに蹤いて

行かなければならなかった。一度小屋の正面廊下へ出て、そこから東側鶺鴒の四扉の前へ廻るのである。

——死んだ祖父殿浦は真山合名会社の二等支配人だったのである。従って祖母にとっても、真山悠子は主家の娘というわけだ。一等支配人は桑岡といって、殿浦より五つほど年長だったが、その頃は定年制もなかったので、殿浦はとうとう一等支配人の夢を果たすことができなくて、桑岡より先に他界した。

「せめて一年でも、一等支配人にしてあげたかった」とは祖母の宮古の口癖であった。殿浦が死んで、続いて桑岡が死んだので、そのあとは桑岡の末弟が心太式に一等支配人に昇格したのである。

——東側の廊下にはいち早く宮古の来るのを知ったとみて、悠子が鶺鴒から降りて、待っていてくれた。

「やっぱり宮古小母様だったわ。さつき幕が開いたとき、小母様らしい方がいらっしゃるなと思ったのよ。お食事はどうなさるの、ご一緒致しませうか」

悠子は如才なく言った。

「いいえ、私共は平土間へお弁当を取って食べますから……今日はお父様やお母様は？」

「両親は侍従長のお招きでちょっと……」
と言いまざらす。

「あら、それじゃあ悠子様おひとり？」

「桑岡さんが来てくれますの」

というところへ、桑岡が出て来た。見るとフロックコートを着ている。シガーカットで葉巻を切りながら、

「宮内省からここへ直行したもんですから。まことに場違いな恰好で、失礼します。フロックコートで芝居見物は、板につきませんなあ」

桑岡は短い時間の間にその言い訳を何度も繰り返した。が、フロックコートはよく似合い、鼻下髯のある口に葉巻を銜えたと、いかにも豪勢なブルジョア会社の支配人らしく見えた。

「そうですか。殿浦さんのお孫さんですか。道理で秀才型の好青年がお供をしていると思った」

——桑岡にそう言われて、幾野は赧くなった。

「彰二さんは誰が好きですか」

悠子が助け舟を出す。

「それほど芝居通じありません」

「では宮古小母様のお相伴なのね。小母様は羽左がお好きなの、わたくし、知ってますわよ」

「何と言っても、今夜の観物は羽左と梅幸の（累）でしょうない」

桑岡はそんなふうに言いながら、宮古の煙管に擦ったマツチで火をつけてくれたりした。悠子が彰二の傍近くスレスレに来て、

「そんなこと言わないで、芝居が好きにおんなさいよ。そしたら時々お誘いするわ。将来は何を専門になさる

の？」

「まだ決まってはいませんが、大学は国文へ行くことになりそうです。どうやら芝居はだんだん病みつきになるんじゃないかな。もつとも祖母のお供では本腰にはなれないから、今度は身銭を切って三階でみようと思っています」

「まあ三階なんて……そういう時は遠慮なく電話を掛けて頂戴。鶉でも棧敷でもすぐ取れますから」

「どうも有難うございます」

彰二は固くなって頭を下げた。

——その頃は開幕知らせのベルもなく、頭取部屋の前から打ち始めて、楽屋を一ト廻りしてくる柁が、舞台へ来て幕の中で打ち出すのを聞くと、見物はソロソロ自発的に土間や棧敷へ入るのである。

六之丞が言った。

「支配人も来ているじやありませんか。無理に貫禄を作ろうとして、髭を生やしたようですね。殿浦の旦那がご健在ならあんな若造が、重役の椅子に坐るなんて法はありやしませんやね。あつしゃ口惜しくってならないよ」

「まあまあそう言わないで」

祖母が竊める。が、そういう宮古も桑岡には好意が持てないらしく、

「社長がおよばれなんで、今日はあの人、代役なのよ」

「それにしても木挽町へフロックコートを着てくる馬鹿がいるんだからいやになるな」

「宮内省から直行したそうだから仕方ないでしょ」

こんどは彰二が執り成した。

お篠は黙って聞いているだけだったが、幕が開きかける頃、

「真山さんのお嬢様って、飛び切りの美人ですわね」

と彰二の耳にだけ囁いた。「近江源氏先陣館」の幕が開き、チヨボが始まった。鶉の悠子の視線は舞台へ七分、三分は彰二のいるこの平土間へ注がれているような気がしてならない。この芝居で首実検する佐々木三郎盛綱は十五世市村羽左衛門の当り役であった。その朗々たる名調子はいまに忘れられない。

彰二はその後、悠子に宣言したように、身銭を切って、三階や立見席へ行くようになった。芝居を安く観る習慣をつけることが出来た。そういう時は遠慮なく電話をかけて頂戴と悠子は言ったが、彰二にはとても出来ない相談だった。歌舞伎座だけでなく、明治座や市村座や新富座へも行った。立見席から首をのぼして、鶉や棧敷の客を物色したが、悠子と再会する偶然は、ついになかった。偶然というものはその度々あるものではないし、彼は百も承知なのに、劇場内に悠子の姿を追求めずにはいらなかったのである。

するうち、東京には大震災が起り、劇場は全部焼失の憂き目に遭った。下町は火の海だったが、伊皿子の真山邸も

中目黒の宮古の家も、幸い類焼を免れた。そのどさくさまぎれに、大杉栄と伊藤野枝及び甥の少年宗一の三人が甘粕憲兵大尉によって虐殺される事件があった。その日大杉らは、新宿角筈の路上から大手町の憲兵隊本部へ連行され、甘粕ほか数人の兵士の手で殺害された。遺体は古井戸へ投げこまれ、その上へ古煉瓦や塵芥を投じて、体裁をつくらせた。犯行は秘密裡に行われ、その上記事掲載差止めになったので、彰二がその顛末を知ったのは記事解禁の九月二十六日のことだった。

——歌舞伎座では悠子に対して、自分の将来進むべき道はまだ決まっていなかった彰二であるが、大震災のあった年には、旧制高校の二年生であり、その市で同人雑誌を発行して、小説や戯曲を発表していたから、彼の将来、文学を選ぶしかないことは、最早自明だったのである。

そういう彰二にとって、大杉らの虐殺事件は重大なショックであった。記事解禁になった新聞をポケットに入れたまま、彰二は目を血走らせつつ、あてもなく市中をさまよい歩き続けた。が、特に大杉及びその思想無政府主義を研究していたわけでもなく、まして大杉に会ったこともなければ、その講演を聴いたこともない。従って、大杉らが甘粕の手で殺戮されていなかったら、彰二は大杉らの思想を、かくまで自己の内部に結びつけることはなかったかもしれない。大杉の死によって、思想的開眼を自分自身に確認した年若い日本人は、決して少い数ではなかったろう。戦後

太宰治が玉川上水で情死行を遂げたために、澎湃たる太宰ファンを生み出したのと同じに、甘粕の手による虐殺が、潮のように、無政府主義的理想を、この国の青年の心に無限大に近く植えつける結果となったと言えないことはない。

その反面、甘粕への弁護はもちろん、英雄的讃美が席卷したことを見逃すわけにはいかなかった。

伊藤野枝は二十八歳であり、少年宗一はわずかに六歳であった。また、習志野第十三聯隊の手で、平沢計七ほか大勢の無政府主義者が銃殺されたし、震災直後に組織された警防団のために、無名の朝鮮人が東京市の内外で、盛んに斬られている。

そういう血なまぐさい中にあつても、彰二は時々、悠子に会いたくなつた。悠子のような階級的立場にある女性は大杉栄や平沢計七らの死をどういう風に見ているであらうか。それを聞いてみたかつたのである。一般的に言えば、悠子のいるブルジョアジーの世界では、恐らく大杉らにもまた彼等が朝鮮人だというだけの理由で、片っぱし殺されていった無名の人々に対しても、殆ど何らの関心もないだろう。そんなことを取り立てて考える必要はないと思つてゐるのだろう。が、悠子という女には、ちょっと違つた思惟がありそうな気がする。

——大杉栄が日本を脱出して上海へわたり、そこで中国人に化け、ニセの旅券でヨーロッパへ行き、マルセーユか

らフランスへ潜入した。更にベルリンの世界無政府主義者大会へ出席しようとして出来なかつた話。一九二三年のメーデーに、パリ郊外サン・ドニでの集会に出席して、全フランスの労働者に送る革命的メッセージを読み上げたあと、フランス官憲に逮捕され、ラ・サンテの刑務所に一ヶ月ほど投獄された話。やがて日本へ強制送還された時、神戸から東京まで一等寝台車に乗って、あたかも凱旋將軍のような昂然たる態度で帰つてきた話等を悠子にも聞かせたかつた。それに関して彼女が少しでも同意を示したら、彰二は大杉の翻訳したロマン・ローランの「民衆芸術論」や、クロボトキンの「青年に訴ふ」や評論集「正義を求める心」などを讀んでみ給えと奨めてもみたかつた。

ところがそれは彰二の空想でしかなかつたのである。彼が悠子に会うチャンスなどは、普通ではあり得べからざることでもあつた。真山徳右衛門は貴族院議員になり、つづいて男爵を賜わるだろうと言う前評判もあつた。会社の経営はますます多角的となり、秘密探偵社が発行する興信録での長者番付では、上位にランクされるようになった。二代目桑岡は理事長のポストにつき、飛ぶ鳥落とす羽振りだつた。すでに殿浦の名は合名会社の内部でさえ忘れられかけてゐる。彰二と悠子との距離は日一日と遠ざかつた。

——震災後の東京ではバラック建築が許されたので、築地に小劇場が建つことになった。そこは何百かの椅子があ

る穴倉のような暗い小劇場だったが、舞台にはクッペルホルンントがあり、美しい夜の星空を表現することに成功した。小劇場の指導者は小山田薫氏である。俳優東屋三郎の紹介で、彰二は習作の戯曲をみて貰うことができた。彼はプログラムの替ることに、通い始めた。新劇のメッカといわれ、特別の響きをもつ銅鑼の音で、葡萄のマークのある幕が開閉するのであった。小劇場の関係者の多くは、藍色のベレを被っていたので、彰二もその真似をした。

悠子のほうでも、彰二の存在を意識しなくなつたと同時に、彰二のほうでも悠子を思い出すことは極めて少くなつた。

確かに彰二は殿浦宮古からの影響まで切り捨てられるかに思われた。年月と共に彼は昔の階級的立場から脱出して、前進的あるいは前衛的でさえあるようなスタイルを見せ出したのだが、その最中に劇しく後退せざるを得ないような月並みな情事に突如嵌まつた。

一の章の三

相手はお篠であつた。

彼女は貴金屬商亀井堂の養女で、女学校を中退したあと、六之丞の世話で、祖母の家へ行儀見習に來ていたのである。亀井堂は池之端の近くにあって、広小路の勸工場や新橋の博品館や帝国劇場の売店にも出店があつた。六之丞は若い

頃二年程亀井堂の手代をしていたことがあり、その時代から殿浦家へ出入りしていたのである。祖母の持っている翡翠とか瑪瑙とか珊瑚珠とかトルコ玉とかは、亀井堂から買ったものばかりである。金時絵の手文庫や帯留や指輪の類も亀井堂に注文して作らせたものだ。お篠は出來た品物を持って來たり、そのまた勘定を取りに來たり、段々出入りが繁くなるうちに、すっかり宮古の氣に入つて、とうとう行儀見習に上りたいといふことになつたのである。當時は桂庵という便利なものがあつて、そこへ電話を掛ければ、女中でも書生でも直ぐ間に合つた。給金も安かつたから、必要な人員をいつでも補充することが出來た。しかし時には山出しの女が來ることもあつた。女工に売飛ばされ損ねたという東北訛りのズーズー弁もいた。その中でお篠は数等立ち優つて見えた。女中の晴着は銘仙だったが、お篠はいつもお召とか一越縮緬とかを着て、五つこはぜのキャラコの白足袋をピッチリ履いていた。お召のむらさき矢絰がよく似合つた。

お篠は彰二より二つ年上であつた。悠子はさらに一つ年上だから、彰二とは三つも違つてゐる。

正直、彰二はお篠に六之丞の手がついてゐるものと思つてゐた。彼女が亀井堂の店番をしていた頃から、六之丞は彼女のことばかり口にしてゐた。よく出來た娘さんで、目から鼻へ抜けるようである。芝居のことにも通じていて、役者の屋号や紋所なども知らないものはない。上方屋のブ